



あまのそらはあはれ

たうし其のそら下  
あまのそらにありけり

酒は野郎のそら

同題に有之

海深きと時あはれ

有之

材料子左に少々

出づれば後候に

沖に上くく

其角々に止め

最も有名なり

曲終不見人

あつきの反吐は

海深きと

(詞書あり)

十五の酒

出さけふの月

野郎有青柳

足あまの直打

酒が

酒のそらにけり





足あゝる直丁に

とくは **酒**が

酒をにけこの 雨夜は

雁ひとつ

よとらてそのほか

風光別我若吟

身

大酒に起つてもの

給

あつろ **酒**の香に

言はせけり

韓退之持酒吟

酒ほろ **舟**も

くらやむ深みか

酒を妻 **妻**と **妻**の

対酌

花見

もと **や** **雛**に

対 **少** **本** **回**

曲のにあの **妻** **妻** **妻** **妻**

茶 **茶** **茶** **茶**

遠 **遊** **醉** **心** **の**

か **か** **か** **か** **か**

車 **の** **女** **は**



茶の味

遠遊酔心の

駕の巻のよみ

車つねの女は

我むすめが

待解無酒

解をそとを専

はらけ月見

得斗酒

開明の階あつめ

生身玉

対友

内花の酒を

虫たしや室の梅

人も米女夜の独酌

初雪や十にあ

酒のめん

金陽

菊の酒葡萄のあらに

たみけ

酔をこ

酒の保布し冷ま

九天どう

酒傳守年往

有人生七十古

稀



九天より降る

酒傳尋常往來  
有入生七十古事  
稀

詩あきんと年々  
今自々酒傳お

酒くちさふも  
剥りけり雲の  
声

和古詩

琴をこぼして水鏡を  
煮る夜酒を

徳利狂人

いたは花ゆにこそ

あま有る酒中

の趣をみたりたもの其  
角くまは無之又

俗句史と解はるに雷

名まきあまの呪

たの無とい

比較しあはれ用ひの

には無いか記や都以外  
の俗語中



比較し、あつたは同様の詩に  
には無いか、記や、御以外  
の儀、詩師等、けい  
海、れ、以、不、の、こ、の、味  
知、下、を、其、角、は、  
有、は

輪寺の傍と  
連聲のかたけり  
對興して

花に酒 傍も傍へ

塩梅

妓子萬三郎 侍して

この花にあ、い、あ、あ、あ

小不旦

酒のさかあにさくら  
花をとりしあま人に

下臥に清味みま

塩梅

花集血 子く、子みわ

人もあ

ぬきあはたか

酒のあ

酒のあ

酔吟

香、い、ち、和、ヤ、リ、手、を



花集白ふく／＼ふみわす  
人もあつ

おまよひはたか  
いけい  
酒のめし

酔吟

雪／＼ちやヤリキチ

小鳥のさけ

あつ／＼かに 猿申一の

趣には 猿鹿

富士の雪を 蝶は

酒をに びりけり

猿のよる酒を 梅が

よとも有るを 克ふ

は取持くとを

明けは 昔昔とやう

／＼／＼ ちり

夕日 ちり ちり

真珠とてを

出丈